

■ フォト・エッセイ ■

「小チベット」ラダックへの冬の旅

写真・文
船尾 修
Osamu Funao



年に一度の祭りの朝、小高い丘の上に建つチェムレ僧院に向かう人々

インド北部のラダック地方は冬の間、陸の孤島となる。ザンスカールやカシミールといった外部世界へ通じる道路は、凍結と積雪のため不通となるからだ。唯一の交通は、デリーからの飛行機便のみ。旅をするには不向きなシーズンだが、むかし会ったラダック人にいわれた「あなたは写真家なのだから、ラダックへは絶対に冬に来るべきだ。夏は外国人ツーリストが多すぎて、ラダック人は本当の姿を見せませんよ」という言葉に導かれるように、私は機上の人となった。

ラダックの首都レーは寒さで凍り付いていた。さっそく宿を探すが、シーズンオフということではほとんどが閉まっている。ようやく開いているゲストハウスを見つけ投宿。七八歳になるという元気なおばあちゃんがオーナーだ。

「寒いのにご苦労様。チェムレの祭りを見に来たのかい？」と彼女がいう。ラッキーなことに明日、チェムレ僧院で年に一度の祭りがあるという。ラダックには全部で十数カ所の僧院があるが、それぞれがチベット暦にあわせた独自の祭りを執り行う。またこれらとは別にロサルと呼ばれる新年祭や仏陀の誕生日なども祝われる。

インドのターター社製の乗合バスで目的地へ向かった。屋根にまであふれんばかりに人は乗っている。これを発展途上の貧しい国の風物と見るか、自己責任を取れる自由な発想の人たちと見るかは、発展や進歩



祭りが佳境に入る頃には、僧院の屋上にまで見物客があふれる



ラダックの首都レーの街は周囲をぐるりとヒマラヤの高峰に囲まれており、冬季は氷雪に閉ざされて外界との交通は断たれる

さまざまな動物や怪物を形取った面をかぶった僧侶が、次々に登場して舞を披露する



というものに対するその人の考え方が如実に反映されるだろう。

荒涼とした小高い岩山がまるごと僧院になっていて、黒やエンジ色のチベット風ガウンで正装した参拝者らが続々と向かっている。アンチヨックと呼ばれる祭りはすでに始まっていた。僧たちが吹き鳴らすホルンのブウォー、ブウォーという低いぐもった音色が聞こえてくる。

ラダックで最も仏教が栄えたのは一七世紀。チェムレ僧院は熱心な仏教徒だったサンゲ・ナムギャル王の死を悼んで一六四五年に建立された。境内はすでに近隣の村からの参詣者で埋め尽くされており、外壁の階上にも人があふれていた。祭りはすでに佳境に入っているらしく、鬼や天狗、虎や鹿などの仮面を被った僧が次々と舞を披露している。

直接的な意味はわからないが、ぐんぐん祭りに引き込まれていく。こうした仮面舞踏は、経典が読めない民衆のために教義をわかりやすく伝えるために行なわれ、鑑賞するだけで自己が救われると信じられている。ラダック人に混じって鑑賞していると、以前に宮崎で見た日本の御神楽とだぶってくる。こちらは天孫降臨の物語を舞によって民衆に伝えてきたのだ。

僧院の本堂内は薄暗く、強い香の匂いが立ち込めている。壁面には無数のマンダラ絵が掛けられ、僧侶たちは楽器を演奏したり経典を唱えたりしている。まだ年端の



僧院内で経典を読む僧侶。境内には厳かな読経の声がこだまする



僧院に預けられた少年僧たち。屈託のない笑顔だが、ときおり家族を思い出すのか、ふと暗い表情をつくるときもある



参拝者の中にはずっとマニ車をまわし続ける信心深い人も多い。マニ車の中には経典が収められており、一回まわすと千回のお経を読んだのと同じ効果があると信じられている

行かぬ少年僧が、バター茶の入った大きなヤカンをさげて僧侶の間を動きまわっていた。各地の僧院にはこうした少年の修行僧が必ず寄宿している。息子が何人かいればそのうちのひとりを僧院に預ける親は少なくない。それは名誉なことであると同時に、一生食いつぶれがないという意味でもある。

年配の僧たちがどこか悟ったようなあつけらかんとした気質の人が多いのに対して、私が会った青年僧たちの表情はどことなく暗く、苦悩が表れているのが印象的だった。想像するに、人生で最も華やかで多感なこの時期に、何の因果で自分だけ修行しなくてはならないのかという苦しみのように思う。少年時代に希望したわけでもないのに、親によって僧院へ出されたのだから。同年代の友人たちはやれ結婚だの彼女だのと浮かれていたというのに、チベット仏教僧は生涯独身で修行に費やさねばならない……。チベット本土の僧院の多くが中国の文化大革命によって破壊されたために、仏教化が衰退してしまったのに比べ、ラダックではその閉ざされた地勢のためかそれが脈々と生きている。「小チベット」と呼ばれる所以である。

しかしラダックにはもはやかつての秘境の面影はない。車で移動すればすぐに気づくことだが、沿道には巨大なインド軍の施設が並び、浅黒い顔のインド兵を乗せたカーク色の軍用車がひっきりなしに走りまわ



リキール僧院前に立つ地元の女の子。ラダック各地にはこのような僧院が十数カ所ある



インダス川上流部で見つけた岩絵。かつて人々がカモシカなどを狩猟しながら旅をしていたようすがよくわかる



レーの街を睥睨するかのよう建つ旧王宮

っている。そう、ラダックは現在、紛争地
ジャンムー・カシミール州の一部なのであ
る。

西にはパキスタンとの停戦ラインが引かれ、北には中国の実効支配地域アクサイチンが控えている。アジアのなかでも政治的に非常に微妙で複雑な位置に、この地域は横たわっている。さらにイスラム色の強いカシミール州への反発も強く、分離独立の動きもある。インド軍がこの地域に目立つほど展開しているのは、そのような理由による。

近代国家が建設される以前は、人々はあるかに自由に往来していたことだろう。私はラダックを東西に横断するインダス河のほとりでその証拠を見つけた。露岩にカモシカなどの絵が描かれており、これとまったく同じものをパキスタンのやはりインダス河沿いで見たことがあるのだ。道路というものがなかった昔、人々は川に沿って狩猟をしながら旅をしていたと考えられる。宗教や文化というものは、かつてはこうして伝播していったのだ。

しかし現在ラダックの国境はすべて閉鎖されており、袋小路のようになっている。それゆえ大国間のパワーバランスに翻弄されながらも、ラダック人は今後ますますチベット仏教に自らのアイデンティティを求めていくに違いない。

(ふなお おさむ／写真家)